

**目からうろこの「自立」と「依存」の関係のお話**

みなさんは「自立」と「依存」とは全く反対の意味であると思っていませんか?その考え方に真っ向から異を唱える方を紹介します。その方は熊谷晋一郎(くまがやしんいちろう)さんと言います。簡単にプロフィールを紹介します。1977年、山口県生まれ。小児科医。新生児仮死の後遺症で脳性まひに、以後車いす生活となる。小中高と普通学校で統合教育を経験。大学在学中は全国障害学生支援センターのスタッフとして、他の障害者とともに高等教育支援活動をおこなう。東京大学医学部卒業後、病院勤務等を経て、現在は東京大学先端科学技術研究センター教授。その熊谷教授が以前受けたインタビュー記事から一部引用します。

**脳性まひとはどういう障害ですか?**

出生時に呼吸が止まるなどのアクシデントが起きて、その後遺症で運動機能や姿勢を維持する脳機能に障害が生じた状態のことです。基本的に、症状がそれ以上進行することはありません。

**一人暮らしを始めたいきさつは?**

小学生の頃、ふと、「親が先に死んでしまったら、自分は生きていられない」と気づきました。当時の私は、生活全般、食事をするのも学校に行くのも、何でも親の介助を受けていましたから。この不安は年齢を重ねるにしたがって大きくなっていきました。親なしで暮らせる“実験”を早めにしておかないとまずいと思っていました。

[中略]

一人暮らしを始めて、まず困ったのはトイレでした。最初はなんにも手を加えていないトイレで、介助してくれる人もいなくて、失禁してしまった。でも、こう体を動かしたらうまくいくんじゃないかとか、ここに手すりを付けたら使えるんじゃないかとか、試行錯誤していくのは楽しい実験でした。私も物に合わせて動きを変えるし、物も私に合わせて[原文ママ]形を変える。どちらかが一方的に譲歩するんじゃなくて、物と私が「互いに歩み寄る」。一人暮らしの体験は、生まれて初めて世界と直接交渉することができた、そんなわくわくする感じがしました。それまでは世界と私の間には、いつも親が挟まっただけで、「向こう側がよく見えない、じれったい!」みたいな感じでしたからね。

**“自立”とはどういうことでしょうか?**

一般的に「自立」の反対語は「依存」だと勘違いされていますが、人間は物であったり人であったり、さまざま

なものに依存しないと生きていけないんですよ。

東日本大震災のとき、私は職場である5階の研究室から逃げ遅れてしまいました。なぜかというとなんて簡単で、エレベーターが止まってしまったからです。そのとき、逃げるということを可能にする“依存先”が、自分には少なかったことを知りました。エレベーターが止まっても、他の人は階段やはしごで逃げられます。5階から逃げるという行為に対して三つも依存先があります。ところか私にはエレベーターしかなかった。

これが障害の本質だと思うんです。つまり、“障害者”というのは、「依存先が限られてしまっている人たち」のこと。健常者は何にも頼らずに自立していて、障害者はいろいろなものに頼らないと生きていけない人だと勘違いされている。けれども真実は逆で、健常者はさまざまなものに依存できていて、障害者は限られたものにしか依存できていない。依存先を増やして、一つひとつへの依存度を浅くすると、何にも依存してないかのように錯覚できます。“健常者である”というのはまさにそういうことなのです。世の中のほとんどのものが健常者向けにデザインされていて、その便利さに依存していることを忘れてるわけです。

実は膨大なものに依存しているのに、「私は何にも依存していない」と感じられる状態こそが、“自立”といわれる状態なのだろうと思います。だから、自立を目指すなら、むしろ依存先を増やさないといけない。障害者の多くは親か施設しか頼るものがなく、依存先が集中している状態です。だから、障害者の自立生活運動は「依存先を親や施設以外に広げる運動」だと言い換えることができると思います。今にして思えば、私の一人暮らし体験は、親からの自立ではなくて、親以外に依存先を開拓するためでした。

**TOKYO 人権 第56号 (2012年11月27日発行)**

インタビュー/鎌田 晋明 (東京都人権啓発センター)

編集/脇田 真也

高校総体もほぼ終わり、3年生は自身の進路実現に向け本格的に動き出します。3年生に限らず熊谷先生が仰るように、進路上の悩みだけでなく、あらゆる悩み事や心配事を1人で抱え込むこと無く、勇気を持って周りの多くの人々に「依存しながら高校生活を過ごしてみても如何でしょうか。考え方や見方を変えるだけで、今より少し楽に過ごすことが出来るようになりますよ。

## 寛容と共生

小論文のテーマとして問われるテーマの一つが「個と公共」です。

個人の利益を最大化することが公共の利益を最大化することに関連性があるかといえば、そうはいえないことがあります。例えでよく使われるのが高速道路の渋滞です。目的地に早く到着したいために高速道路を使います。時間を高速料金で買うわけです。車両の数が少ない場合は、予定通りの目的がかなうのですが、個別の移動の時期が重なると高速道路は渋滞となり利用者全体(公共)にとって利益は最小化となります。個の利益と公共の利益が反比例の関係になってしまいます。身近でいえば、全校生徒959名が体育館に一斉に集合し、その後教室に帰るときにも起こります。特に非常事態の際には、もっと混雑・渋滞が起こり、ひどい場合は事故にもつながります。慌てているときこそ、ゆっくり、急げ。

このような社会現象はよく起こります。個の利益と公共の利益をうまく比例の関係にするためにはどのようなことに留意して行動するべきか。個と公共のともに利益を生み出す仕組み・関係性はどのように構築すればいいのか。考えてみてください。身近に沢山具体例があり、問題を分析することが一つの学問にもなります。(渋滞学という学問もあります)

言葉や思想の違いにより、科学の発達などにも違いが現れているようです。自然と人間は対立の関係にあり、人間の科学の力で自然をコントロールしようとする考え方。自国ファーストで全てを推し進めようとする考え方。科学の力にも限界があり、環境破壊が生じ、結果的に人間の暮らしに渋滞が起こっています。

日本は昔、家屋も自然と共生したもので、暮らしにはほどよいバランスがとれていました。自然と対立することなく畏敬の念を忘れずに自然と一体となり日々の生活を営んできました。時代が進むにつれ、グローバル化が進むにつれて、自然と対立している構造が見えてきて、科学の進化が果たして人間の幸福に本当でつながってきているのかが疑問に感じる毎日です。情報化が進み、楽になり、生活にゆとりが生まれるかと思いましたが、毎日がより忙しく感じます。

社会問題は簡単には解決することは難しいです。その時代や文化・思想、価値観などいろいろなものと対立します。自然と人間、社会と個人、会社(組織)と個人、個人と個人。対立の関係性で捉えていくことは解決の方法を狭めてしまうのでないでしょうか。そこで、最近、新聞等や本などで見たりする言葉が「寛容」と「共生」です。

自分と家族、組織、社会、自然などと関係性は多様にあります。どのように考えて、どのような視点で関係性を構築するかで、ベストではないかもしれませんが、ベターなものを作り出せて、気が楽になるかもしれません。